

# 近代の女性を対象にした社会教育

——穂積歌子の慈善活動の例から——

小平 美香

(一) はじめに

ただ今の田所先生、藤本先生のお話を伺わせていただきまして大変勉強になりました。私は社会教育の専門ではありませんので、今回の発表は一体これで良いのだろうかと思いつながら準備をしておりました。実は奉仕している神社で、五年前にパブリックスペースを作りまして、「杜のまちや」というこのスペースについて、藤本先生も色々なところでご紹介くださいました。現在、ここを中心に神社が主体になって地域の人たちと「まちづくり」を始めておりまして、そうした意味で「社会教育」というタイムリーなお話を伺わせていただいたなと思っております。今日はその話ではなくて「近代の女性を対象にした社会教育」というお話をいただきましたので、穂積歌子の日記から慈善活動の例を少し皆さまにご紹介したいと思っております。

す。

これは昭和二年、穂積歌子と渋沢栄一の「父と娘」の写真です。このとき渋沢栄一は八七歳、娘の歌子は六五歳です。穂積歌子は渋沢栄一の最初の妻、千代との娘、長女ですけれども、歌子は結婚後早々に母・千代を亡くしてしまっています。ちょうど今NHKで『青天を衝け』というドラマをやっていますが、歌子の母・千代に対する思いというのは非常に深く、その思い出を歌子は『は、その落葉』<sup>1)</sup>という冊子にまとめています。一方で歌子の父・栄一に対する思いというのも非常に深いもので、八〇の齢を超えた渋沢栄一が、いろいろなところから講演を頼まれると、歌子は体のことが心配で「渋沢に好意を持ってくださっているならばどうか老人を虐待しないでください」と講演を阻止するというエピソードを、『婦女新聞』を主宰した福島



「歌子と栄一」（『穂積歌子日記』より）

四郎<sup>(2)</sup>が記しています。また歌子の父に対する思いは、息子の重遠が言うには、まるで恋人に対する愛のようなもので、その愛も普通の愛ではなく熱愛という程度のものと称しています。歌子と栄一の関係というのは非常に深いというのが、こうしたエピソードからも分かるのですが、実際に昭和六年の十一月の一日に洪沢栄一が亡くなると、歌子は八〇歳になる直前の昭和七年一月三十一日に死去しておりまして、まさに歌子と父との関係というものの深さが感じられるところです。

## (二) 『穂積歌子日記』と歌子

歌子は明治二三年から昭和七年一月に亡くなるまで四二年間の日記を残しています。この膨大な日記を孫の穂積重行が編さんして、平成二年みすず書房から『穂積歌子日記』<sup>(3)</sup>として刊行しています。穂積歌子という人物は、それほど有名ではないかもしれませんが、明治期の女性の一次史料というのは非常に数が少ないと言われておりますので、その日記は大変貴重な史料です。先ほど国民教化の話を藤本先生がしてくださっていましたが、国民教化を担当する教導職には女性もいました。余談ですが、大教院の中にあつた女教院の女性の教導職について調べられておりました、教育とまだ宗教が分離していない当時、女子教育に関わっていた女性たちが多く教導職になっています。跡見学校を創立した現・跡見学園の学祖、跡見花蹊も実は日記を残していました、これは女性史としても神道史としても貴重な国民教化の歴史が書いてあります。『穂積歌子日記』とともに『跡見花蹊日記』も非常に重要な一次史料でしょう。この『穂積歌子日記』は、明治三九年までのものですから、これ以降の日記の刊行も待たれるところです。

## (三) 歌子の社会活動

歌子を考えるうえで、洪沢栄一、千代の長女であるということはもちろん、法学者穂積陳重の妻であったことも重要です。

孫の重行は、普通の家庭婦人という立場から、この日記のことを「奥さまの日記」というふうに表示しています。しかしその一方で、レジュメの資料②をみていただきますと、明治三十七年当時、四二歳の歌子はこれだけの社会活動に関わっており、やはり歌子は普通の家庭婦人とは言い難いと思います。歌子の社会活動として、明治三十七年の日記の最後に自分が関係する団体と役職が列記されています。資料の通りAからSまでさまざまな団体に関係し、そして役職に就いているということです。これを見ていきますと、東京府の養育院慈善会議定員や竜門社名誉会員など、明らかに父の渋沢栄一の関係する組織もあります。確かに歌子が渋沢栄一の娘だということ、貴族院議員になった学友夫人であることに起因する部分もありますが、かくも多くの社会活動に歌子が関わっていたことは、栄一の娘や、陳重の妻という属性だけでは説明できないのではないかと思つていきます。そもそも、これだけの克明な日記を残したということ自体、歌子の評価を考える上で重要なことであろうと思います。

#### (四) 歌子の慈善活動

歌子の社会活動を日記からみていくと、現在でいうところの福祉活動に大きく関わっているということがわかります。当時「慈善」という言葉がふさわしいのですが、この日記を特に慈善活動というところから追ってみました。この内訳を見てい

ただくと、①渋沢栄一の活動を支援する養育院を中心とするものと、②慈恵医院慈善会に代表される昭憲皇太后を中心とするもの、③女子教育のネットワークによるもの、この三つに大体分けられます。歌子は明治五年東京に創立された官立女学校（東京女学校）に入学していました、草創期の近代的な学校教育を受けた女性の一人ということは重要な点であろうかと思えます。明治の皇后、昭憲皇太后による赤十字社の活動に象徴されるように、慈善活動というのは近代国家の中で女性の役割に位置付けられています。当時のメディアの一つで、明治一八年に刊行されましたキリスト教に基づいた女性の啓蒙雑誌『女学雑誌』<sup>(4)</sup>には皇后はじめ女官について、詳しく記事に書かれています。こうした記事には政府高官の女性たちの慈善活動も「女学」という位置付けで、『女学雑誌』の中で盛んに記事になっています。とりわけその皇后の慈善活動の影響力は非常に大きかったということが、雑誌を見ておりますとつぶさに分かります。

#### (五) 慈善会と歌子

例えば明治二〇年代の『女学雑誌』の記事によると、各県に「婦人慈善会」というものができています。「京都婦人慈善会」「大阪婦人慈善会」など、各地にできた婦人慈善会では、師範学校女子部の生徒がオルガンをもって皇后陛下の御製なる「金

剛石」の唱歌を奏したり、あるいはまた、皇后が奨励した洋装の導入に関する諭告「婦女服制の思召書」などが、会のはじめに読み上げられています。このように当時皇后は女子教育だけではなく、慈善活動の象徴であったことも、こうした女性雑誌の資料から読み取ることができます。歌子の慈善活動は、栄一の活動だけではなく、皇后の慈善活動とも深く関係しているのです。

揚州周延の錦絵<sup>5</sup>に、明治一七年に婦人慈善会が主催した鹿鳴館でのいわゆる「バザー」を描いたものがあります。錦絵には「慈善事業出品会」というふうに書いてありますけれども、この出品会に関わった女性たちの名前が記されています。例えば伊藤博文の妻や、大山巖の妻で、岩倉使節団と共にアメリカに渡った留学生・大山捨松ですとか、そうそうたる女性たちがここに記載されています。この名前の中には穂積夫人、そして洪沢令嬢と出てきます。このバザーは、有志共立東京病院の支援組織「婦人慈善会」が看護婦さんを養成する学校「看病婦教習所」を設立する資金を集めるために行われました。『穂積歌子日記』以前の歌子の慈善活動が、こうしたところにも見えます。有志共立東京病院は東京慈恵医院と改称されますが、明治二〇年代になりますと洪沢栄一の後妻、兼子の名前も出てきて、洪沢家が慈恵への後援を熱心に行うという形になっていきます。もちろん洪沢栄一も支援を行っていますが、まず初めに

婦人慈善会に歌子の名前があるということは非常に注目される  
ところですよ。

歌子は実は母の千代に幼いときから、栄一が非常に力を入れていた養育院に連れて行かれたという記事が『は、その落葉』にあります。

「母君はすべて表さまの事にはつとめてかかづらはぬ様に  
なし給ひけれど、大人のわきて御心こめさせ給ふ養育院の  
事のみは常に深く御心を用させ給ひ折々は、わらは等とも  
なひて隣なる人々のありさまを見に行かせ給ひ、法会など  
営む折はもちいひのたぐひを施し給ふことありけり。」<sup>6</sup>

このように洪沢家の子どもたちは、慈善活動を実際に見て体験していました。そして歌子の日記を見ても、歌子自身も千代と同じように自分の子どもたちを慈善活動に連れて行っています。若くして亡くなった千代に代わり、洪沢家の中で慈善を啓蒙するという役割をおそらく歌子が担っていたのではないかと思われれます。例えば原胤昭という有名な社会事業家がいますけれども、明治三四年九月、原氏が歌子を訪ねてきたときに、歌子は原氏を支援することを承諾するのですが、それだけでなく、すぐさま弟の篤二やそのお嫁さんに電話をして、協力してほしいということを働きかけています。

洪沢栄一の福祉活動というのは非常に有名ですが、歌子の慈善活動とも相互に関連していると考えられます。栄一と歌子双

方の史料を読み解くことで、栄一だけにとどまらず歌子や渋沢家全体の慈善活動の実態が明らかになっていくのではないかと思います。

またバザーなどを通じて婦人慈善会に歌子が参加していたことは、その後、明治二九年に昭憲皇太后の御沙汰によって歌子が東京慈恵医院の常置幹事に任命されることにつながったはずです。慈善活動を通じて皇后とのつながりがここでより大きくなっていきます。もう一つの慈善活動は、女学校時代のネットワークを通じたものです。東京女学校では後に共立女子職業学校を創立した鳩山春子や、石井筆子も同窓です。日記によれば、歌子は鳩山春子を通じて社会活動に参加しており、津田梅子らとの関わりもおそらく春子を通じてではないかと考えられます。

#### (六) おわりに——日記にみる歌子の人物像

また、明治二四年に歌子は貴族院に出かけて行って、谷干城や福羽美静の演説を聞いています。<sup>(7)</sup>そして谷の講演の内容が感心しないとか、福羽の演説の内容が奇妙位で格別のこともなしと評し、さらに今日の婦人傍聴人は自分とともに七人だったと記録しています。明治三八年一月一日の日記<sup>(8)</sup>には新年拝賀に参内した歌子が、婦人の拝賀は大変少なく、それが非常に恐れ多いと書いています。まさに「皇后陛下に申し訳ない」との思い

が感じられる書きぶりです。

先ほど見てきました社会活動の中で、歌子は女子美術学校あるいは女子実習学校の評議員となつていますが、これらの学校は女性の自立や社会的地位の向上を建学の精神として掲げています。こうした校風の学校に歌子が関わつてるといふところも、歌子という人物を考える上で非常に興味深いところです。歌子は、鳩山春子のように学校教育を受けた期間は長くありません。転居のため女学校も明治九年には退学してしまいます。しかし明治六年に東京女学校に皇后が行啓された折、歌子は優秀だったので、皇后の前で『日本国盡』を暗唱しています。『は、その落葉』にはその時の行啓の様子について「後の宮は初めてここに行啓あらせられ、生徒なる女の童がもの学ぶさま見そなわせられ、書籍一部ををのにもに給はりけり。」<sup>(9)</sup>と書いてあります。このように歌子は昭憲皇太后と、学校という場で既に接点がありました。歌子が受けた草創期の女子教育、そしてその教育を受けたということに対する自負と共に女子教育を支援していた皇后とのつながりは、渋沢家の慈善活動とともに歌子の慈善活動、あるいは社会活動の大きな基盤になつていたことが日記から理解されます。

また、昭憲皇太后については、先ほど出てきました国民教化にもかなり力を入れていたのではないかと私は推測しております。女子教育だけでなく女性の教化という点でも、当時の皇

後の働きを追っていく必要があると思っています。  
非常にまとまらない内容でしたが、以上報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 注

- (1) 穂積歌子『は、その落葉』竜門社、一九九〇年  
 (2) 福島四郎「理想の婦人穂積歌子刀自」昭和七年二月一日『婦女新聞』（福島四郎『婦人界三十五年』不二出版株式会社、一九八四年、八〇三―八〇四頁）。『婦人会三十五年』巻頭の重遠の序文に、歌子は福島四郎（一八七四―一九四五）により明治三年の『婦女新聞』創刊からの精神的後援者であり愛読者だと記されている。  
 (3) 穂積重行編『穂積歌子日記 一八九〇―一九〇六 明治一法学者の周辺』みすず書房、一九八九年  
 (4) 『複製版 女学雑誌』臨川書店、一九六六年  
 (5) 鹿鳴館貴婦人慈善会図 明治一七年 揚州周延（早稲田大学図書館蔵）[ch105\\_03887\\_p0004.jpg](http://ch105_03887_p0004.jpg) (1728 × 2592) ([waseda.ac.jp](http://waseda.ac.jp))  
 (6) 穂積歌子『は、その落葉』五五頁（前出）  
 (7) 明治二四年一二月一四日記事（『穂積歌子日記』前出、二〇二頁）  
 (8) 明治三八年一月一日（日）「昨夜は風吹きあければ今日天気いかにと思ひしに、風静り快晴となり、気候は例年の元日より少し寒けれどどかじめでたき日和となりぬ。早朝より支度にかかり、旦那様自分大礼服にて午前九時馬車にて出で、九時三十分二重橋正

- 車寄より参内す。（中略）天顔には多みをたたへ給ひていつよりことに御けしきうるはしく皇后陛下にもことさらに今日は若やぎ給ひて拜まれぬ。皇后陛下御服は、御裳は白にうす緑の花もやうあり、珊瑚色ともいふべき淡紅色のトレインを引かせ給ふと見奉りぬ。（中略）今年には婦人の拝賀いかにも少数、宮内省方にて三人の外、午前拝賀の組にて参内せしもの、島津婦人 自分 長井夫人テレー夫人僅か四人なり。かく夫人の少なきは恐多き事なり。かへすがへすもよくこそ思ひ立ちけれ。」（『穂積歌子日記』前出、八六八頁）  
 (9) 穂積歌子『は、その落葉』一八一―一九頁（前出）

## 第3報告「近代の女性を対象にした社会教育—穂積歌子の慈善活動の例から—」資料

学習院大学・学習院女子大学非常勤講師 小平美香

## 穂積歌子（文久3年〔1863〕～昭和7年〔1932〕）

渋沢栄一、千代の長女。法学者・穂積陳重（1856～1926）の妻。『穂積歌子日記』は明治23年から昭和7年までの歌子の日記のうち明治39年までの日記であり、孫の穂積重行によって刊行されたもの。同記は「数少ない女性の一次史料」（御厨貴編著『近現代日本を史料で読む』中公新書、2011年）と評されている。

## 資料① 明治37年当時の歌子（42歳）の社会活動

a. 慈恵医院慈善会幹事、b. 東京府養育院慈善会議定員、c. 愛国婦人会会員、d. 愛国婦人会牛込区幹事、e. 大日本赤十字社正会員、f. 大日本赤十字社特志看護会会員、g. 竜門社名誉会員、h. 質問会会員、i. 大日本婦人衛生評議員、j. 出征軍人家族慰問婦人会理事、k. 同牛込区専務委員、l. 育児会会員、m. 牛込区婦人会会員、n. 保育会会員、o. 体育会女子部会員、p. 海事協会女子部委員、q. 軍人家族授産会会員、r. 女子美術学校評議員、s. 女子実務学校評議員（明治37年の日記末尾に関係する団体と役職が列記されている）

## 資料② 穂積歌子評

「婦人問題、労働問題、国際問題、平和問題、その他いかなる問題についても、刀自は一個の見識を以て意見を立て、又それについての他人の意見をも傾聴せられた。私はかなり多くの婦人を知っているが、刀自の年輩で刀自ほどに、各種の問題を理解し、且それに対する独自の意見を立てられた婦人は故人中にも思ひ當らない。」（福島四郎「理想の婦人穂積歌子刀自」（『婦女新聞』昭和7年2月14日記事）『婦人界三十五年』）

## 資料③ 穂積歌子略年表

和暦	西暦	歌子年齢	歌子／栄一
文久3年	1863		渋沢栄一（24歳）、千代（23歳）の長女として8月誕生。
明治2～3年	1869	7歳	下谷で南画家・奥原晴湖に学ぶ。琴を習う。／栄一、民部省に仕官。
明治5年	1872	10歳	東京女学校（竹橋女学校）入学。／栄一、大蔵省三等出仕。（学制頒布）〔養育院創設〕
明治6年	1873	11歳	11月、東京女学校に行啓。歌子、皇后より褒賞を受ける。／栄一、大蔵省退官、第一国立銀行総監役。
明治7年	1874	12歳	／栄一、東京会議所の会頭となる。当時養育院は東京会議所の管轄下。
明治9年	1876	14歳	引越しのため東京女学校退学。／栄一、東京会議所会頭兼業務、養育院及び瓦斯局事務長。
明治12年	1879	17歳	／栄一、養育院院長となる。
明治15年	1882	20歳	4月、法学者・穂積陳重と結婚。7月、母・渋沢千代（42歳）死去。
明治16年	1883	21歳	／栄一（44歳）、伊藤兼子と再婚。
明治17年	1884	22歳	6月、婦人慈善会により、鹿鳴館で慈善事業として出品会（バザー）を開催。歌子参加（錦絵）。
明治18年	1885	23歳	11月、鹿鳴館で第二次出品会開催。皇后・皇太后の行啓あり。
明治23年	1890	28歳	9月、渋沢栄一、穂積陳重、勅撰により共に貴族議員となる。
明治27年	1894	32歳	3月、歌子、大婚二十五年宮中饗宴に栄一と共に参内。
			阪谷、渋沢栄一の六十年史編纂にあたり、その付録として歌子が追憶文『は、その落葉』記す。
明治33年	1900	38歳	『は、その落葉』刊行。

明治 34 年	1901	39 歳	4 月、女子大学（日本女子大学）開校式に行き、栄一の講演を聞く。
明治 39 年	1906	44 歳	
大正 15 年	1926	64 歳	12 月、夫・陳重死去。
昭和 6 年	1931	69 歳	11 月 11 日、渋沢栄一死去。
昭和 7 年	1932	70 歳	1 月 31 日、歌子死去。

穂積重行編『穂積歌子日記 一八九〇—一九〇六 明治一法学者の周辺』（みすず書房、1989年）参照。